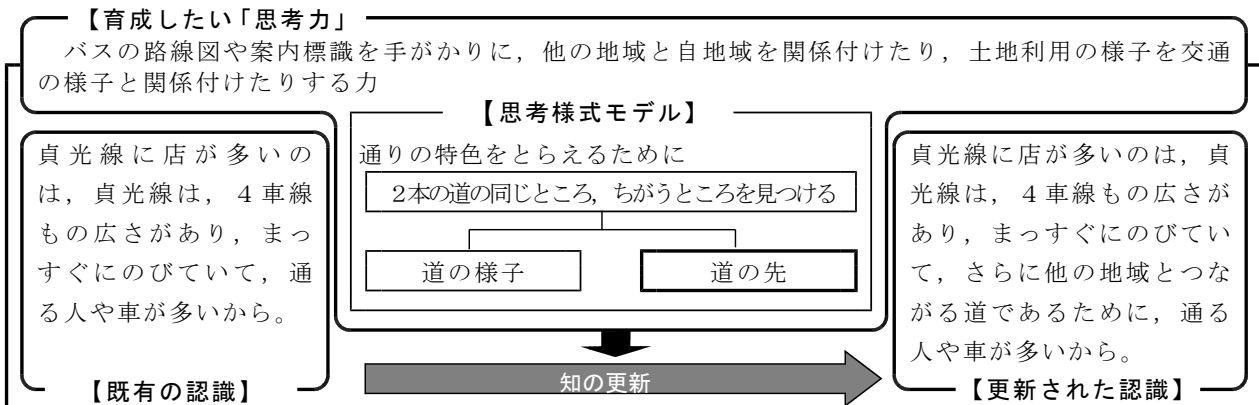


4 思考様式を共有化するユニバーサルデザインの授業の実践

「たんけん 発見 附坂小のまわり」(第3学年)

(1) 本実践の目標構造



本実践前の子どもたちは、学園通りと貞光線の道の様子を比較して、「貞光線は広いから店が多い」という認識をもっていた。その認識を、上記右の認識に更新させることをめざした。

そのためには、道が複数の地域を結んでいることに気付き、その道を通る人や車によって、地域を結ぶ道沿いの土地の使い方にも違いがあるということに関係付ける力が必要である。なぜなら、広い道沿いに店が多いのは、その道が、広いかどうかということ以上に、どこにつながっていて、どのような人や車が通っているかに左右されるからである。広い道は、より広い地域とつながっているからこそ、店は商圈としての客の集まりを期待できるのである。

さらに、そのためには、「道の様子」だけでなく、「道の先」を見る本思考様式が必要となる。

(2) 思考様式を共有化する言語活動

① 集団吟味による「承認・合意」

見通しを立てる場面で、子どもたちに2本の道の写真から分かることを発表させた。「貞光線は道が広い」といった発言から、「貞光線にはバス停がある」「高校の名前を書いた看板がある」というバス路線や案内標識に着目する子どもの意見を取り上げ、バス停の有無や標識が示す場所について比較させた。これにより、「貞光線にお店が多いのはどうしてだろう」という学習課題の解決のためには、道沿いにある物だけでなく「案内標識やバスの路線図を手がかりに、その道を通る車がどこどこを走り来するのかを調べればよい」ということに気付いていた。それを、「道の様子」、「道の先」という視点で板書に位置付けることで、「2本の道の同じところ、ちがうところを見つける」という本思考様式を「承認・合意」していった。

② 体験の言語化による個の「実感・納得」 ～ユニバーサルデザインの働きかけ～

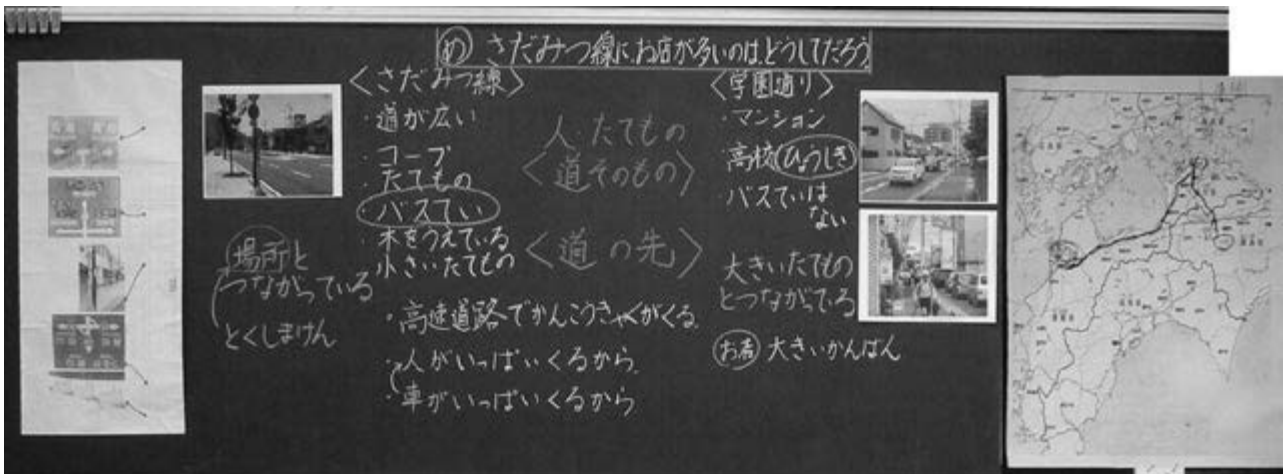
白地図を活用して案内標識とその標識が指す場所までの道を色鉛筆でなぞることで、地域間のつながりの広さを体験的・視覚的にとらえる。

自力解決で考えたことを検証するために、地図を用いることにした。しかし、白地図や行政地図を見ただけでは、他の地域とのつながりが十分にとらえられない子どもがいると想定した。そこで、案内標識上の地名と、本実践にかかわる道路を載せた白地図を準備した。その白地図に、案内標識のある場所と示されている場所を、学園通りと貞光線で色を変えてなぞらせた(情報を精選し、手元で操作させる)。これにより、子どもたちは、学園通りの標識とそれが示している場所との間は、わずか1mmにも満たないのに対し、貞光線のそれは10cm以上の広い範囲にのびているという違いをとらえることができた。

このように、案内標識の示す場所の違いという視点に焦点化させながら、2本の道につながる先を順になぞらせ、それぞれの道の空間的な広がりや違いを明らかにすることで、本思考様式のよさの「実感・納得」をめざした。

(3) ユニバーサルデザインの働きかけによる学習指導の実際

① 本時の板書



② 「思考様式を共有化する言語活動」の詳細

ア 見通しの場面

本時は、前時までに調べた学校の近くの2本の道について子どもたちが気付いたことを整理し、貞光線は4車線あってお店が多く、学園通りは2車線あってお店があまりないことを確認した。この事実から、「貞光線にお店が多いのはどうしてだろう」という学習問題を設定した。

次に、この学習問題を解決するための見通しを話し合った。探検に行った時の写真を見直し、比べることで、2本の道の違いである、道の広さ、街路樹という「道の様子」で比べたいと子どもたちは考えた。そこで、案内標識をヒントにして、学校の近くの道がどこにつながっているのか、その場では見えない「道の先」も手がかりにして2本の道の同じところと違うところを比べて解決していくことを「承認・合意」していった。子どもの反応は以下の通りである。

- T:何を手がかりに考えようか。
C1:道の広さや道路に植えている木があることから考えたらいいと思います。
C2:人の数や車の数から考えたらいいと思います。
T:道の様子で比べたらいいということだね。でも、(板書にある高校の文字を指す。)道の様子からは高校があることは分かってないのに、何からこの辺りに高校があることが分かったのかな。
C3:標識です。
T:標識には何が示されているの。
C4:その道の先に何があるかです。
T:なるほど、ここに見えていなくても、標識を見れば、道の先にあるものが分かるんだね。学園通りの標識と貞光線の標識では随分書いていることが違うね。ということは、道の先にあるものも随分違うんだらうね。このことは、お店の多さと関係がありそうかな。
C5:関係あると思います。
T:「道の先」も手がかりになりそうだね。(板書に「道の先」を書く。)では、どうして貞光線にはお店が多いのか、ノートに書きましょう。

イ 自力解決の場面

子どもたちの中には、案内標識を見ても、そこに書いていることをどのようにして比べたらいいのか分からない子どもがいることが予測された。そのような子どもたちは、ノートに「(貞光線の方が)車や人がいっぱい通るから」「貞光線にはバス停があって人がたくさんおるから」と、前時までに認識していることを書いていた。そこで、「標識に書いている場所がどこにあるのかを比べてみよう。」「バスや自動車に乗っている人は、どこから来たのかな。」と問いかけることで、「道の先」をより強く意識して考えるように促した。

ウ 振り返りの場面 ～白地図上で標識と標識の示す場所をつなぐ教材～

子どもたちは、学園通りが自地域内をつないでいる道であるのに対し、貞光線が自地域だけでなく、他地域ともつながっているというそれぞれの道の特徴に気付いていった。

しかし、2本の道の違いに気付いた子どもたちも、貞光線の案内標識にある町に行ったことがある子もいれば行ったことがない子もいる。行ったことがない子にとってみると、聞いたことがない地域だから遠いんだろうという漠然とした意識になることが予測された。そこでまず、主要道路を記入した四国の白地図を配布して、貞光線の案内標識にある地名(丸亀・高松・松山・貞光)が、それぞれどのあたりの地域なのかを確認した。そして、案内標識とその標識が示す地域までの道路を色鉛筆でなぞっていった。学園通りは、案内標識のある建物までが近すぎてなぞることができないくらい短くなった。それに対して、貞光線の場合は、県内外にまでつながっていることを確認することができた。



【地図上の道をなぞる】

このように、必要な情報だけに精選した資料を色鉛筆でなぞらせるという働きかけにより、遠くにつながっている道はたくさんの地域とつながっているから、通っている人や車が多いということに気付くことができ、「道の先」を考える思考様式のよさを「実感・納得」していった。

(4) 成果と課題

① 量的・質的な検証

本実践の前後でテスト(8点満点)を行い、「思考力」の伸びを検証した。その結果、平均値で0.11点の向上が見られた。この差についてt検定を行ったところ、有意差が見られた〔 $t(37) = 1.84, P < .10$ 〕。このことから、本実践を通し「思考力」の向上は図られたと言える。また、思考様式の広がりに関しては、本実践の前後で比較して22名から26名に増加した。

学校の近くの道がどんな道かを調べるためには、どのようなことを考えたらよいかを聞いたところ、抽出児の反応は、次の通りだった。

高1児：標識を見て、その道がどこにつながっているのかで調べたらいい。

高2児：「道の先」を見て、つながっている道をなぞる。

低1児：どこから車が来ているかを見る。

低2児：道がどこにのびているのかを調べる。

このことから、「道の先」に目を付けて考えるという思考様式を意識することができていると考えられる。

② 考察

今回の実践では、道の特色をつかむ際の思考様式として、「道の先」に着目することをめざした。上記の検証から、貞光線に店が多い理由を、他の地域とつながっているという空間的な広がりを意識して考えることができるようになったと言える。それは、2つの道の違いが顕著に現れる情報を精選して提示したことや、それが標識という身近なものを手がかりとしていたことが有効に働いたのではないかと考える。

しかし、思考様式の広がりが26名にとどまったことが課題として残る。授業リフレクションで、自力解決場面での思考が十分に保障されていなかったことが指摘された。この課題を解消するためには、見通しの場면을改善する必要があると考える。具体的には、それぞれの道の案内標識の示す先を具体的に比較し、子どもの表出したことばを整理することで「道の先」を意識付け、それを手がかりにすると、学習課題を解決できそうだという見通しをよリモたせることができたと考える。